

笑わせることの考察（2）

～永六輔の観察眼俳句を読む～ 土屋泰山

前回紹介した俳優小沢昭一とともに、ラジオの世界で長く親しまれたのが永六輔（一九三三～二〇一六）である。戦後七十年を、放送、舞台、作詞、芸能研究、出版と幅広く活躍した「巨人」である。

その永六輔が、言葉を生業とする仲間と一九六九年に「東京やなぎ句会」を結成した。創設時のメンバーには、九代目入船亭扇橋、小沢昭一、江國滋、三代目桂米朝、大西信行、十代目柳家小三治、矢野誠一、三田純一、永井啓夫がいた。この句会は、柳家小三治が二〇二一年に亡くなり、矢野誠一が「終息宣言」をしたが、その矢野も昨年七月に旅立った。

永六輔によると、「俳句を始めたら、作詞が出来なくなった」そうである。今回は、永六輔没後に刊行された『六輔五・七・五』（岩波書店 二〇一八年）の二千句余りから、俳諧の「諧」にこだわったという永の滑稽句を拾ってみたい。

おどろくないまわのきわの朝寝なり（一九六九）

大仰な命令調から「いまわのきわの」と続けて、「朝寝」で予想を裏切る。高度成長期に、「朝寝坊」は白眼視されるが、それを泰然自若とした佇まいで言っただけだ。歌舞伎の大見得を切る明るさも感じる。

蒲公英がなびいてジャンボ着陸す（一九七一）

ジャンボ機が着陸した。タンポポの小と飛行機の大の対比。作者の生命への共感も醸しだされている。

ほおずきがなる入れ歯もなる（一九七五）

ほおずきを鳴らすのは厄除けのためだが、鳴らした時の音を聴いて、入れ歯と気付いたのだ。

立ち上がり弁慶のごと蟹怒る（一九七九）

京の五条の橋で弁慶が長刀を振り回す図は、浪曲・虎造節でも知られるが、そ

れを蟹の動きに観るとは。蟹の赤と両腕を天に向ける様は、なかなかどうして。これも歌舞伎舞台の華やぎを醸す。

医者若く「臨終」の声爽やかに（一九八〇）

「死者」と「若い医者」の対比、「臨終」と「爽やかさ」の対照も見事である。

松過ぎて忌中の家の笑い声（一九八〇）

こちらは忌中だった家の松明けの景。喪中は静かに声も出さない。それはある意味苦しいことでもあろう。松明けになれば、その自粛から解放される。

新緑や濃淡濃淡濃淡淡（一九八八）

これは、切れ字の後が実況中継になる。その景が漢字によって伝わる。絵も鮮やかだ。楽しくかつ的確に表現するラジオ職人、永六輔ならではの。

紅葉の宇宙宏大いろは坂（一九七九）

「宏」は、奥行きや空間の豊かさを示す。いろは坂を下る時、この感動は一入だ。漢字を選ぶ観察眼。目も心も満腹である。笑顔になる。

これはこれは新茶ですかと一人言（一九八〇）

思わず出た言葉を句にした。「一人言」は傍で聞いていると、思わずくすっとする。そこに目を向けるとは、ただならぬ観察力。

まずそうにビール飲んでる奴がいる（一九九一）

これも偶々目に止まった景をそのまま句にしたものだが滑稽感が滲む。その男の顔が彷彿とする。「写生」を提唱した正岡子規のような眼に驚く。流石は「旅をしてマイクに向かった職人」である。

（了）